

# 石川啄木と徳富蘇峰

——〈或連絡〉について——

田口道昭

一

蘇峯の書を我に薦めし友早く

校を退きぬ

まづしさのため

石川啄木の歌集『一握の砂』（一九一〇・明治四十三年十二月、東雲堂）の「煙」の章には、徳富蘇峰（二八六三〜一九五七）に触れた歌がある。『石川啄木事典』の「徳富蘇峰」の項目には、この歌を引用して「啄木は盛岡中学在学時代、同級生、伊東圭一郎の影響で蘇峰に親しみ始めた」とあるが、事実はこれと異なる。伊東圭一郎の回想では次のように書かれている。<sup>②</sup>

明治三十三年ころには総合雑誌は博文館発行の「太陽」ぐらいのもので毎号連載される高山樗牛の評論は評判だった。

阿部さんはいつもそれを紹介されたが、啄木も樗牛博士には傾倒していた。小沢さんは文学談で啄木とよくうまが合った。また恋愛問題はこの両君の受持ちであった。小野さんは口数の少ない人であったがよく聴き手で同人間に推重されていた。

私は初め徳富蘇峰びいきで「国民新聞」の愛読者であったが、それが桂内閣の御用紙になってからは「万朝報」に変えた。

当時の啄木の盛岡中学時代の同級生たちとの交流の様子を伝えるものであるが、ここに記載されているように、啄木が傾倒していたのはやはり高山樗牛であって、歌にあるように蘇峰の書を薦められて「親しみ始めた」という事実はなかったのではないか。右の回想は、伊東自身、蘇峰から離れていったことを伝えているほか、別の章では「ニーチェの天才論 みずからを天才と自認」という表題で、啄木の樗牛を通じたニーチェへの傾倒ぶりを伝えている。また、そもそも右の歌のモデルに関して、伊東は、「この歌は私のことを詠ったものだ」と書いている本もあるが、私は貧乏だったけれど兎に角中学だけは無事に卒業したから、私のことではなく、古木巖のことのようである」と指摘し、「古木君はせいひの低い口の達者な文学青年で、徳富蘇峰の文体を真似た文章を書いた」と書いている。<sup>④</sup>

また、『事典』項目は、啄木の蘇峰への関心を示す一例として蘇峰が執筆した「結婚論」<sup>⑤</sup>を挙げているが、啄木の日記が伝えるのは、次のような厳しい批評である（明治三十五年十一月十九日付）。

伊兄蘇峯を品隲して稍正鵠に近し、彼が業すでに終れり、「結婚

論」の近作の如き吾人その浅薄甚しきを認む。

伊東から送られてきた手紙に対する感想だが、ここでは、啄木たち青年と蘇峰との乖離を伝えている。蘇峰の「結婚論」は、「恋愛を以て、唯一の要素となしたる結婚は、果して多幸多福なる生涯を、贏け得たる乎」と問いかけ、そういうこともあれば、そうでないことも多いと述べ、「此の冷熱頼む可らざる情を以て、唯一の紐帯と為す。吾人は寧ろ其の大胆なるに驚かざるを得ず」と書いており、こうした言葉が、『明星』派の恋の歌に傾倒していた啄木たち青年に受け入れられなかったことは想像に難くない。

伊東の回想には、「初め徳富蘇峰びいきで『国民新聞』の愛読者であったが、それが桂内閣の御用紙になってからは『万朝報』に変えた」とあるが、明治二十年代に「平民主義」を鼓吹し、論壇の関心を集めた徳富蘇峰は、三十年代には青年たちの心を捉えるには至っていなかった。伊東は、桂内閣の御用新聞になってから、と書いているが、蘇峰に対する世間の批判は、彼が松方正義内閣の内閣参事官に就任し、『国民新聞』を「政府の機関紙」にしようとした頃にさかのぼることができる。<sup>7)</sup> いずれにしろ、蘇峰と明治三十年代の青年たちとは距離があったといえよう。<sup>8)</sup>

細々とした伝記的事実を取り上げたのは、啄木が蘇峰に向き合ったのは、明治四十二(一九〇九)年以降のことであって、明治三十年代前半の盛岡中学時代ではないことを確認しておきたいからである。

掲出歌の「蘇峯の書」を特定することはできないが、おそらく、啄木の盛岡中学在学中の明治三十年代当時の蘇峰の書ではなく、木股知史が言うとおり、その代表作『将来之日本』(経済雑誌社、明19・10)や『新日本之青年』(集成社、明20・4)が念頭にあり、掲出歌の眼目は「青年の自立を説いた蘇峰の書物を読めといった友が貧困のゆえに退学していった

ことにアイロニーが感じられる」といった指摘が妥当であろう。

また、この歌には「蘇峯の書」を勧められた当時の「我」と蘇峰との距離だけでなく、蘇峰の説いた「生産社会」による富国化が達成されずにいることに対する現在の「我」の観察眼をも示唆しているように思われる。

この歌を詠んだのは明治四十三年のこと(歌集初出)であり、掲出歌の批評性は、明治四十二年以降の蘇峰に対する関心と結びついている。

## 二

啄木が徳富蘇峰について本格的に言及するのは、評論「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」(「スバル」明43・1)である。<sup>9)</sup> 評論は、冒頭、数寄屋橋で電車を降り、出社まで時間、銀座の裏通りを歩いたときのことから書き起こされる。そして、並木の下で見掛けた「高価な焦茶色の外套を着た一人の老紳士」の微笑に、「適度に働いて来た人の柔かな満足の表情」を見つける。しかし、そこで対照的に思い出されるのは、「我々の時代の日本の富有な老人によくある、せせこましい、或はだらしない、或は辛うじて生きてるやうな、或は人を凌ぐやうな不愉快な体つき」である。このとき「将来の日本」、「従来(従来)の日本」ということが脳裏をかすめると思われる。「生産的(生産)の社会」を構想した蘇峰の書を念頭におきつつ、「日本が現在の富——物質上にも理想上にも——を得る為には、今迄にも随分過度の努力を要し」、「従来(従来)の日本」の為に年を老つたやうな人達」を作り出して来た。「今の日本の老人に洋服を着せたら、恐らくは十人に九人迄はボンチ画の種にならずには済むまい」という言葉には、日本近代への批評が含まれている。しかし、そうした老人を生み出したものが、

一方の現実であるとすれば、「老紳士」を生み出したのももう一方の現実である。「幾度も幾度も振り返つて」見たその老紳士に、「生々した眼をした若い女が何処からか出て来て、その紳士と手を組んで、並木の下を歩き出したなら、私はまたどれだけ喜んだか知れない」と啄木は言う。「将来の満足」、「将来の日本」の方向について、「老紳士」の歩んで来た道に期待をかける啄木がいる。

蘇峰の『将来之日本』は、世界の大勢として、腕力社会から平和的世界へ、武備社会から生産主義へ、貴族社会から平民社会へ移行するといふ三つの構想を挙げたものだが、その主張の根底に「余ハ固ヨリ日本全体ノ利益ト幸福トヲ目的トシテ議論ヲナスモノナリ。然レトモ其議論ノ標準ナルモノハ唯ターノ茅屋中ニ住スルノ人民是レナリ」といった考えがある。それは、啄木の文章中の「我々の将来の満足！」という言葉とも照応するものだろう。また、『新日本之青年』では、「天保ノ老人」に對して「明治ノ青年」が對置され、「平民社会」を推し進める担い手とされているが、その「明治ノ青年」たちも既に壮年となり、啄木たち明治四十年代の青年と對峙しているといえよう。「時代閉塞の現状」をはじめ、啄木の思想には世代論的な発想がみられるが、その意味で、「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」を含め、啄木の評論は、蘇峰に対する次の世代の応答ともいえるだろう。

ところで、『将来之日本』が刊行された前年の一八八五年から一九〇九年までのGNP（国民総生産／実質）を比較すると、三十八億五千万円から七十三億五千七百万円となり、倍に迫っている<sup>⑫</sup>。これを一八八五～一九一四の三十年間でみてみると二倍となり、同じく経済成長を開始したイタリアやオランダの三十年間と比較してもその成長率は高く、人口一人あたりのGNPも一・七倍強だという。しかし、その内実は、在来産業、とりわけ農林水産業の比率が高く、「工業化」というにはまだ遠い状

況だった<sup>⑬</sup>。加えて、日露戦後の恐慌による不況に加えて、日露戦争の折の多重債権の負担に苦しむ政府は、地租の増徴や都市商工業者に対する増税諸法案を提案せざるを得ない状態だった。

「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」に先立って、啄木は「岩手日報」に「百回通信」（明42・10・5、6、9、10、12、13、14、15、16、17、20、22、23、24、28、29、30、11・7、9、11、12、13、14、16、17、18、20、21）というエッセイを寄せている。原稿の掲載を依頼した新渡戸仙岳には、「『国民』の『東京たより』が差当りのお手本に候」（明42・9・28）と手紙に書いており、蘇峰執筆の「東京たより」を意識したものであることがわかるが、ここにも日本の現状を冷静に見定めようとする姿勢がうかがわれる。

日本の国情は恰も成上りの新華族の如し。交際には慣れず、金は無し、家の普請、庭の手入、それ相應に格式を張つて行かねばならぬところに、他から見えぬ氣兼遣練ある事にて、年中心配の絶間なく候。小生は日本人の一等国呼ばはりを聞く事に冷々致候。

〔百回通信〕八

小生は日本の現状を以て真に主義主張の争ひをなす迄に進歩したるものとは信ずること能はず。明治文明の生活の内容は案外に貧弱なり。此貧乏世帯の切盛は要するに前後の問題にして是非の問題に非ず。《中略》今日の如く日本人の国民生活の内容、物質的にも精神的にも貧弱なるに於ては、早かれ晩かれひどい目に遭ふの時期到達致すべく候。

〔百回通信〕十二

このような現状認識を持ちつつ、明治四十二年秋以降の啄木は、「遠い

理想のみを持つて自ら現在の生活を直視することの出来ぬ人は哀れな人です、然し現実には面接して、其処に一切の人間の可能性を忘却する人も亦憐な人でなければなりません、「我々は乃ち進んで、このやうな状態になつたところの原因を探求し、闡明し、而して更に創造者の如き勇氣を以て現在の生活を改善し、統一し、徹底させねばならぬではありませんまいか」(大島経男宛書簡、明43・1・9)と語り、日本の現状を厳しく見つめた上での文明批評を試みていた。そして、この時期の啄木の考え方を支えたものとして、漸進主義的な改革をめざす生活哲学としての田中王堂のプラグマティズムがあった。

それは、過去の啄木自身あるいは日本人の姿勢を問い直すものだった。同時期に発表された啄木の「文学と政治」(『東京毎日新聞』明42・12・19、21)には、次のような一節がある。

国と国との戦争の目的は、一国若しくは両国が其現在の国力及び其国力から生れる欲望によりよく満足を与へるところの平和を獲ると言ふ事である。ところが明治三十八年夏の末に於ける日本人の多数は、それを忘れて了つてからに、どうせ露西亜の奴と戦争を始めたからには、理が非でもウラルを越えなければならぬ——少くともバイカル湖までは推詰めなければといふやうな考へで殆んど噪狂患者のやうな盲目的熱狂を以て、唯々戦争其物の中止に反対したといふ趣きがあつた。日比谷に大旗を推立て「国辱！」と連呼した人達は、愛国者には違ひないけれども《中略》現在の国力といふ一大事を閑却した、幼稚な空想的な、反省の足らないことは中学生位の程度な愛国者であつた。

そして、これが、当時の「愛国者」がポーツマス条約締結当時の自分

自身の姿でもあつたことを反省し、「あの当時の兎玉大将なり内閣の人達のえらい事を思はずにゐられない」と書いている。ここで兎玉源太郎のことが触れられているのは、現地戦線の状況を知る兎玉が、講和条約の際に、賠償金など取れるものではないことを語っていたことを指すと思われる。

桂太郎内閣と関係の深かつた蘇峰も、講和条件でロシアから賠償金とれるものではないことを熟知していた。このとき蘇峰は、「吾人と雖も、若し出来得可くんば、或る極端なる論者の如く、樺太のみならず、沿海州を割取し、バイカル湖を以て、その分界とせんことを欲せざるにあらず。償金の如きも、三十億以上を得んことを好まざるにあらず。然れども是れ赫々たる戦功より幻生したる空想にして、之を實現せざるが為めに、直ちに平和条約を詛ふが如きは、是れ寧ろ狂漢に類せずや」(『講和成立』「国民新聞」明38・9・1)と書いたのだった。しかし、『都新聞』が「屈辱的平和に満足するものありとせば、五千万の同胞中僅かに十六人あるのみ、其十人ハ内閣員なり、其四人は元老なり、他の二人ハ高平全権委員と徳富蘇峰なり」(明38・9・1)と批判したように、蘇峰の経営する『国民新聞』は政府の「御用新聞」と目され、日比谷焼討ち事件において襲撃をうけている。これに対して、蘇峰は、「彼の毫も世界の大成に通ぜず、帝国の立場を詳にせず、当今の時務に就て、殆んど盲目なる徒」と「此の煽情的問題を否貨とし、平生の私憤を霽さんとする徒」と「此の国家的問題をば、營業的問題の手に供せんとする輩」が焼討ち事件を起こしたとして批判した(『天下の大事を誤る者』「国民新聞」明38・9・7)。明治四十二年末の啄木には、こうした当時の蘇峰の姿勢も思い起こされたのではないか。

ところで、蘇峰は、「新聞によつて、吾が主義主張を天下に宣揚せんがため」(『蘇峰自伝』)、現実政治に影響力を行使しようとして当時の桂内閣

とも強くむすびつき、「国家主義」の鼓吹に力を入れていった。日露戦争当時は、挙国一致の機運を盛り上げるため、日露戦後は、日比谷焼討ち事件にみられる〈群衆〉を目の当たりにして、国民統合のかなめとして、より「国家」の重要性を説くようになった。

「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」は、先に見たように、冒頭に蘇峰を念頭に置いた記述があり、その後、森鷗外、「二重の生活」、田山花袋、道徳について、「利己の畏」、自然主義と国家の問題、永井荷風の作品、といったように断片的かつ随筆風に論じていく。そして、荷風の「帰朝者の日記」(『中央公論』明42・10)を「永く東京にゐて金を使つた田舎の小都会の金持の息子が、故郷へ帰つて来て、何もせずにはぶらぶらしてゐながら、土地の芸者の野暮な事、土臭い事を、いや味たつぷりな口吻で逢ふ人毎に説いてゐるやうな趣き」と批判した文章に続く一節に蘇峰の名前が登場する。

国家！ 国家！

国家といふ問題は、今の一部の人達の考へてゐるやうに、そんなに軽い問題であらうか？(菴に国家といふ問題許りではない。)

昨日迄、私もその人達と同じやうな考へ方をしてゐた。

今、私にとつては、国家に就いて考へる事は、同時に「日本に居るべきか、去るべきか」といふ事を考へる事になつて来た。

凡ての人はもつと突込んで考へなければならぬ。今日国家に服従してゐる人は、其服従してゐる理由に就いてもつと突込まなければならぬ。又、従来の国家思想に不満足な人も、其不満足な理由に就いて、もつと突込まなければならぬ。

私は凡ての人が私と同じ考へに到達せねばならぬとは思はぬ。永井氏は巴里に去るべきである。然し私自身は、此頃初めて以前と今

との徳富蘇峯氏に或連絡を発見する事が出来るやうになつた。

鹿野政直は、「このしたたかな国家主義者について、なぞのようなことをのこしている」と述べたが、後に「国家」を「オオソリテイ」と規定し、「敵」とみなした啄木、という先入見を取り除いてみれば、決して謎ではない。<sup>⑦</sup>「百回通信」に書かれた次の文章が、当時の啄木の国家に対する姿勢を示している。

独逸の一小説家、嘗て其著書に、素樸なる地方人が都会に出て、三代にして遂に故郷に対する憧憬を忘れ、全く都会の放浪者となりたるの事実を指摘したる由に候。今や凡ての人間も、嘗て追はれたる楽園を忘れて、人間の故郷は実に人間現在の住所に外ならざるを知り、あらゆる希望憧憬を人間本位に集中するに至り候、近代文明の特色は此にあり、将来の趨向も此にあり。(『百回通信』二)

啄木にとつて、「国家」は、人間が生きて生活する(場)だったのである。ただし、先の文章では、日本の現状に照らして、そのことを果たして肯定しえるかどうかという厳しい問いかけとともに蘇峰が想起されている。啄木は、「私自身は、此頃初めて以前と今との徳富蘇峯氏に或連絡を発見する事が出来るやうになつた」という。上田博は、これについて、「『以前』の蘇峰は『将来之日本』において、生産的の社会の実現によつて、平民的の社会の実現を説いた青年蘇峰であり、『今』の蘇峰は「国家主義の発揚を説く初老を迎えた蘇峰である」とし、『物質主義』の強調も、今また『精神主義』の強調も、その根底にあるのは『人民多数の愉快、満足、幸福』(『将来之日本』)の実現のために、全体(国家主義)に重心をかけるか、個(平民主義)に重心をかけるかの相違にすぎなかつた、

「蘇峰の国家主義は、したがって、平民主義の今日的な展開であるとする見方も成り立つであろう」と指摘する<sup>88</sup>。実際、蘇峰は、「尊王主義が平民主義の父母であると云ふ事を云ひ得れば帝国主義は平民主義の長兄であると云ふことを云ひ得るのである」(「平民主義と今後の政治」「中央公論」明41・3)というように、「平民主義」を定義づけ直したうえで、イギリスにおける「労働者養老金法案」の議論を紹介しながら、「平民主義の大勢」に乗って、「政治家の仕事」は「内に於ては社会政策を布き、外に向ては帝国主義を施し、一般人民を提げて起つ」ものであると述べている。その国家主義に疑義を感じつつも、「我々の将来の満足」を希求し、その実現に向けて現実主義的にかかわるうとしていた点において、啄木にとって蘇峰という存在が切実な意味をもって立ち現われてきたといえよう。

### 三

さて、「我々の将来の満足」という課題に対して、当時の啄木の用意した考えは、「一国民生活の改善は、実に自己自身の生活の改善に初まらざるべからず」(「百回通信」二十)という言葉や、「現在の日本には不満足だらけです、然し私も日本人です、そして私自身も現在不満足だらけです、乃ち私は、自分及び自分の生活といふものを改善すると同時に、日本人及び日本人の生活を改善する事に努力すべきではありませんまいか」(大島経男宛書簡、明43・1・9)という言葉に示されているように、いわば個人の生活の改善と国家の改善とがつながるといふ、非常に素朴なものだった。これが啄木自身の樗牛流の「天才主義」からの脱却という個人史的な軌跡の上では切実なものであったとしても、早晚破綻せざるをえないものであった。

実際、啄木の周辺にあったのは、現実の政治過程からの疎外といった事態である。たとえば、「百回通信」は、三回にわたって地租軽減問題に言及している<sup>89</sup>。明治四十二(一九〇九)年十二月に始まる第二十六議会に向けて、三〇%の官吏増俸をめざし、地租増徴を打ち出した桂内閣と、逆に地租一%減を党議決定した政友会とが対立することになった。桂太郎の官僚閥族と西園寺公望の政友会がもちつめたれつとの関係で政治をおしすすめていた桂園体制の中、結局は、官吏増俸給二五%、地租〇・八%減で妥結した<sup>90</sup>。啄木は、「桂卿の八方美人的な一視同仁主義と政友会の不得要領なる妥協主義とが、不即不離の間に兎も角もいらざる騒ぎを抑へつゝあるは至極結構なる事。大した失策なき限り、国民は黙つて彼等に世帯のメ括りを任せて置いて然るべく、而して人々唯々一意自己の生活の改善を計るべく候」と述べ、先に紹介したように、「今日の如く日本人の国民生活の内容、物質的にも精神的にも貧弱なるに於ては、早かれ晩かれひどい目に遭ふの時期到達致すべく候」と指摘するのである。明治末年の有権者総数は約百五十万人に過ぎず、成年男子の八人に一人は選挙権をもっていない時代であり、衆議院の過半数を握っていた政友会は、百五十万有権者の過半数の支持を得ていたにすぎない<sup>91</sup>。現実の議会政治とは隔てられたところで、「自己の生活の改善」を考えることしかできなかつたのである。

また、同じ「百回通信」に、啄木は「諸有建設は其最も低きところより創められざるべからず候。此意味に於て、如何なる国如何なる地方にとりても、其最も喜ぶべきは、最下級自治団体の自覚的行動なるべくと存候。廟堂の大官の脳中に蟠まる大経綸よりも、一小農村の覚醒の方が事実としての価値遙かに多し」(「百回通信」六)と書くが、現実には上からの地方改良運動が展開されていた。啄木の残した原稿断片「農村の中等階級」(執筆年月日不詳)には、「農村の疲弊」状況に対する「振興改良」

の流れとして、「二宮流の勤儉貯蓄主義を中心思想とする消極的のもの」と「農業そのものに絶望せん」としつゝ、ある青年子弟に自覚を促して、それによつて萎靡を極めてゐる農業と沈滞を来してゐる最小自治区にと新精神を与へんとする積極的のもの」があるとしている。啄木自身は、「封建時代の道徳をその儘取つて以て新日本の標準道徳としようとすると内閣の連中の保守思想に就いては、没分曉でもあり不可能でもあると思つてゐる」として後者を支持するのであるが、一方で、「一般都市より十年もその余も文明の程度の遅れてゐる農村などには、二宮流の消極的道徳を極端に行ふなども時に取つて一方法であることは拒み得ない」としてゐる。「二宮流の勤儉貯蓄主義」とは、地方改良運動の流れの中で組み込まれていった報徳社の活動のことで、「一九〇五年一月、内務官僚・実業家・教育家有志によつて催された二宮尊徳没後五〇年祭を契機に」報徳会として再編され、「内務省の別動隊として国民教化・統合に大きな役割を果たした」という。<sup>22</sup> 明治四十一年に桂内閣の平田東助内相が「地方団体は国家の基礎にして自治制は国法の大本なり」と声明し、同年一〇月の戊申詔書を機に地方改良運動を推進、四十二年七月には、内務省は地方改良事業講習会を開いている。のちの啄木の言葉でいえば、「強権の勢力は普く国内に行亘つて」（「時代閉塞の現状」）だったのである。

一方、徳富蘇峰において「自愛」と「他愛」の結合といふかたちで試みられたものは、「国家」に対する精神的同一化にゆきついでいた。<sup>23</sup> かつて徳富蘇峰は、平民主義の担い手を「田舎紳士」に求め、その「独立自営」の精神を称揚した。「商売ノ利己主義ハ我ヲ利シテ又彼を利スルナリ」（「将来之日本」）といったように、それは「全体の幸福」にもつながるものとしてイメージされていた。しかし、植手通有のいうように、彼が期待した「農民層の階層分化が急激に進行しはじめ、豪農層の多くは農業経営からきり離されて寄生地主化する一方、その一部は没落して中

農層や小作層に転落していった<sup>24</sup>。また、政府に対抗することを期待した自由党と改進黨の進歩党連合構想も現実政治の中で挫折していった。<sup>25</sup> 将来之日本」の担い手を失った時、蘇峰は、現実的に権威を握る政治家と結ぶことによつて、自己の「理想」を実現しようとしたのだ。また、日露戦後の日比谷焼討ち事件や、その後の中国旅行を経て、「数」つまり群衆ということを意識させられたことは、『国民新聞』の世俗化、大衆化とともに、国民の求心的な装置として「皇室中心主義」を打ち出していくことになる。<sup>26</sup> 蘇峰の「平民主義」は、その担い手を失つて以来、権威主義的秩序の形成に邁進していったといえよう。

明治四十三年の三月に啄木は宮崎郁雨にあてて、「我等の人生は、今日既に最早到底統一することの出来ない程複雑な、支離滅裂なものになつて」おり、「意識しての二重生活」を送らざるを得ないことを表明している。明治四十二年秋以来の「自己の徹底」「二重の生活」の統一という主張からの後退ともいえるべき発言だった。

そんな折に発生した大逆事件は、啄木に「国家」という枠組みを強く意識させるものであった。

#### 四

大逆事件発生後に執筆された啄木の評論「時代閉塞の現状」に関して、北川透が「発想や思考のスタイルが、意外に蘇峰や樗牛に似ている」とし、それは「（青年の）自己主張というような世代的発想に依拠」していると指摘していることに注目したい。「我々日本の青年は未だ嘗て彼の強権に対して何等の確執をも醸した事が無いのである」という認識から、「自然主義を捨て、盲目的反抗と元禄の回顧とを罷めて全精神を明日の考察——我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬので

ある」と訴えた啄木の「時代閉塞の現状」には、確かに、世代論的な発想が濃厚にある。そして、そこには、単に世代論的発想にとどまらない蘇峰との共通点もうかがえる。それは、青年と国家の関わり方に対する強い意識である。それは、啄木によって次のように描かれている。

「国家は強大でなければならぬ。我々は夫を阻害すべき何等の理由も有つてゐない。但し我々だけはそれにお手伝するのは御免だ！」これ実に今日比較的教養ある殆ど総ての青年が国家と他人たる境遇に於て有ち得る愛国心の全体ではないか。さうして此結論は、特に実業界などに志す一部の青年の間には、更に一層明晰になつてゐる。曰く、「国家は帝国主義で以て日に増し強大になつて行く。誠に結構な事だ。だから我々もよろしくその真似をしなければならぬ。正義だの、人道だのといふ事にはお構ひなしに一生懸命儲けなければならぬ。国の為なんて考へる暇があるものか！」

斯くて今や我々青年は、此自滅の状態から脱出する為に、遂に其「敵」の存在を意識しなければならぬ時期に到達してゐるのである。それは我々の希望や乃至其他の理由によるのではない、実に必至である。我々は一斉に起つて先づ此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元祿の回顧とを罷めて全精神を明日の考察——我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬのである。

「時代閉塞の現状」は、「国家」に対して無関心なまま私的関心のみ傾倒する青年たちに対して、「国家」Ⅱ「強権」という『敵』の存在を意識することを呼びかけたものであるが、そこには、「国家に就いて考

へる事は、同時に『日本に居るべきか、去るべきか』といふ事を考へる事になつて来た」(前掲「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」とまで思いつめた啄木の認識の延長線上にある。

国家と青年の關係については、『将来之日本』や『新日本の青年』以来、蘇峰が関心を寄せてきたものだが、それは、明治三十年代においても強く意識され、言及されていた。たとえば、明治三七(一九〇四)年九月二十五日に『国民新聞』発表された「青年の風氣」では、非戦論を唱える若者を「彼等は少くとも眼中国家あり、且つ国家を自個の主張に同化せしめんとする抱負の有無は」「聊か興に談ずるに足るを認む」とする一方、「国家生死存亡の大事を、余所に見て、何等の喜憂を覚へざる、無頓着の輩に至りては、殆んど済度の途に窮せざるを得ず」と述べ、「憂ふ可きは、非戦論者にあらず、無戦論者なり」と批判している。また、「地方の青年に答ふる書」(『国民新聞』明39・2・18、3・4、11、18)では、「人生問題の研究に従事」し「煩悶」する青年に向かつて、その根源に「恋愛」という問題があることを指摘し、「美的生活」を捨て、むしろ「国家と結婚」すべきと説く。「国家の愛護者」(『国民新聞』明41・11・29)では、綱島梁川に触れながら、「学者とか文士とか称し、若くは称せらるゝ輩が、国事に冷淡なるを、其の本領かの如く誇るものあるを見て、甚だ健全なる傾向なりと信ずる能はざる」ことを述べる。「成功狂」(『国民新聞』明38・5・28)、「乃公本位」(『国民新聞』明42・2・14)、「中毒せる成功論」(『国民新聞』明42・4・18)では、日露戦中戦後、青年たちに蔓延した成功熱に対して、警鐘を鳴らしている。さらに、「当今我国の青年作家なるもの」が「非愛国の精神を鼓吹」したり、「社会の根柢を、性慾に措き、神聖なる可き夫婦の關係を、唯だ一種の性慾關係となし」(『東京たより』「国民新聞」明42・10・19)たりすることを批判している。蘇峰は、後に『大正の青年と帝国の前途』(民友社、一九一六・一〇)において、「横



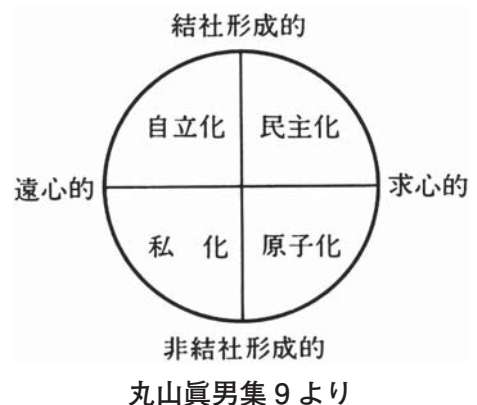
「範青年」「成功青年」「煩悶青年」「耽溺青年」「無色青年」というかたちで青年を分類し、批判したが、とりわけ「耽溺青年」に対して「手の著け様もなき也」と厳しく指摘したことをはじめ、意外に啄木の主張との共通性があることに気づかされる。

例えば、「成功青年」に関しては、先にみたように、「実業界などに志す一部の青年」の問題点として指摘されている。「煩悶青年」に関しては、啄木自身がかつて梁川に傾倒していたこと、そして「時代閉塞の現状」では止揚されるべき対象として論じられていることが指摘できる。そして、「耽溺青年」たちについては、次のように描かれている。

斯くの如き時代閉塞の現状に於て、我々の中最も急進的な人達が、如何なる方面に其「自己」を主張してゐるかは既に読者の知る如くである。実に彼等は、抑へてもく抑へきれぬ自己其者の圧迫に堪へかねて、彼等の入れられてゐる箱の最も板の薄い処、若くは空隙（現代社会組織の欠陥）に向つて全く盲目的に突進してゐる。今日の小説や詩や歌の殆どすべてが女郎買、淫売買、乃至野合、姦通の記録であるのは決して偶然ではない。

ところで、筒井清忠は、明治三〇〜四〇年代の新しい青年類型として、「成功」青年、「墮落」青年、「煩悶」青年（星董党）つまり文学青年も含む）を挙げている。これは、丸山眞男の「個人析出のさまざまなパターン」<sup>⑤</sup>における「私化」に該当する。丸山は、伝統的社会からの解体過程において、あらわれる個人析出のパターンを「自立化」(individualization)、「民主化」(democratization)、「私化」(privatization)、「原子化」(atomization)の四パターンに分けている。そして、政治的権威の中心に対して求心的であるか遠心的であるかを横軸に、「多様な目的を達成するために隣人と

結びつく素質」を示すものである結社形成的であるか、非結社形成的であるかを縦軸にして、「自立化」を遠心的・結社形成的、「民主化」を求心的・結社形成的、「原子化」を求心的・非結社形成的とした。そして、「時代閉塞の現状」にみられる啄木を「自立化」に分類できるとしている。本稿の論旨に即していえば、啄木は、「私化」の側面



(星董党、煩悶青年、墮落青年)を持っていたが、「自立化」に移行し、「私化」を厳しく批判していったといえよう。一方、蘇峰の希求する青年像は、「自立化」(遠心的・結社形成的)から、「原子化」(求心的・非結社形成的)へと反転したといえようか。それは、蘇峰の発言で言えば、「個人的平民主義より、国家的平民主義となり、自由平和の理想家より、力の福音の信者となり、遂ひに帝国主義者として、東洋自治論の唱道者となりたる」(「大正の青年と帝国の前途」)という言葉に凝縮されているだろう。「原子化」された個人をたばねるのが、「国家」であり「皇室」であるといえようか。そして、「精神的に走るものは精神的の主我的傾向を取り、物質的に走るものは物質的主我的傾向を取り、何処までも主我的であつて、唯々我といふことのみを考へて他に及ばないのであります」(「当今の青年と社会の気風」「中央公論」明38・1)と批判したように、蘇峰にとつても青年の「私化」的傾向こそが克服すべき課題だった。

いづれでもなく、大逆事件以後、社会主義、無政府主義思想を受容し、国家制度を批判していった啄木と、かたや国家主義、皇室中心主義を鼓吹していく蘇峰に大きな違いはあるだろう。にもかかわらず、大状況を

前にして「私化」に埋没する青年への批判という点で大きな共通点もあつたのである。いわば、啄木が「国家」を「敵」とすることによつて、〈我々〉青年の存在を具現化・顕在化させようとするものであるとしたら、蘇峰は、「国家」の中に青年たちの生存の意義を求めようとしたというべきか。そして、それらはその後の政治状況の中で分化し、対立していった。

## 五

明治四十四年一月十八日に大逆事件の被告二十四名に死刑の判決が下つた（翌十九日、うち十二名が無期懲役に減刑）。十九日の日記に啄木は次のように書いている。

朝に枕の上で国民新聞を読んでゐたら俄かに涙が出た。

「畜生！ 駄目だ！」さういふ言葉も我知らず口に出た。社会主義は到底駄目である。人類の幸福は独り強大なる国家の社会政策によつてのみ得られる、さうして日本は代々社会政策を行つてゐる国である。と御用記者は書いてゐた。

十九日の『国民新聞』の「東京たより」には、「逆徒の生出」は「精神的黒死病」のようなもので、「聖徳をして全国民に光被せしめ<sup>マ</sup>。村に無告の民なく、家に凍餓の人なからしむる」こと、つまり、「社会政策を普及するは、根本的治療の第一義」であると書かれてゐる。このとき、啄木と蘇峰はもつとも対極的な位置にあつたといえよう。啄木が残そうとした記録の一つである「トルストイの日露戦争論」（明44・4～5稿）には、日露戦争時に『東京朝日新聞』、『週刊平民新聞』、『時代思潮』に掲載されたトルストイの非戦論に対する批評に触れて、「日本第一流の記

者、而して御用紙国民新聞社長たる徳富猪一郎氏は、翁《トルストイのこと―引用者》が露国を攻撃した点に対しては、『これ恐らくは天がトルストイ伯の口を仮りて、露国の罪惡を弾劾せしめたるの言なるべし。』と賞讃しながら、日本の行為を攻撃した部分に対しては、『此に至りて伯も亦スラーヴ人の本色を脱する能はず候。』と評した」と批判している。なお、この一文に先立つて、「日本人——文化の民を以て誇称する日本人の事物を理解する力の如何に浅弱に、さうしてこの自負心強き民族の如何に偏狭なる、如何に独断的なる、如何に厭ふべき民族なるかを語るもの」として、トルストイが戦争の原因を「個人の墮落」としたのに対して、社会主義者が「経済的競争」に原因を求めたことについて、「少しも眼中に置か」なかつたことを指摘している。蘇峰の批評もまた「畢竟『日本人』の批評であつた」として批判されるのだが、ここでは、啄木が「日本人」という言葉でナショナルなものを相対化しようとしてゐること、及び、「文学と政治」（前掲）での自身の見解を超えた観点から日露戦争を相対化していることに注目しておきたい。

明治四十四年の啄木は、「時代進展の思想を今後我々が或は又他の人か、唱へる時、それをすぐ受け入れることの出来るやうな青年を、百人でも二百人でも養つて置く」（平出修宛、明44・1・22）ための雑誌を啄木は計画している。「無政府主義はどこまでも最後の理想」だとし、「實際家は先づ社会主義者、若しくは国家社会主義者でなくてはならぬ」（瀬川深宛、明44・1・9）と自己規定する啄木は、「一院主義、普通選挙主義、国際平和主義の雑誌を出したいと空想してゐました」と言いつつ、「時代進展に一髪の手でも添へうれば満足」（平出修宛、明44・1・22）という。また、啄木が、「屹度書きたいと思ふ著述」として『明日』とともに『第二十七議會』という書名を挙げていることも注目しておきたい（宮崎大四郎宛、明43・12・21）。「これは毎日議會を傍聴した上で、今の議會政治の

ダメな事を事実によつて論評し議会改造乃ち普通選挙を主張」しようというものであったが、いわば急進的改革の方向ではなく、現実立脚した改革志向である。ここには、「国家」を「敵」とする地点に進みつつも、明治四十三年（一九一〇）年一月九日の大島経男宛書簡で、「あらゆる思想、あらゆる議論の最後は、然して最良の結論は唯一つあります、乃ち実行的、具体的といふ事です」といった精神が生きているように思われる。<sup>⑦</sup>

同じ頃、蘇峰は「危険思想」（『国民新聞』明44・4・16）という文章を書いている。ここで蘇峰は、「何者を以て、危険思想と為す乎の先決問題ありと信ず」と述べ、「人心の萎靡不振」こそ問題であると指摘する。「一国の人心が、無頓着となり、潰瘍となり、一切弾力を失し、浮生の享樂以外に、何等の理想をも抛却する」ことは一見無害に見えながら「其実は国家の元気を沮喪せしめ、社会の結合力を散滅せしめ、延いて国家を解体せしむるもの」であり、「破壊主義」と結びついた「虚無主義」（この場合、当時の無政府主義者を指す）と比べて、ほとんど「予防するの道」もなく、「大なる危険」だと言う。主要な敵はやはり青年の「私化」的傾向だった。注目すべきは、蘇峰もまたこの後、普通選挙制度を主張していくことである。先の丸山の分類に従えば、原子化された個人の自発性を喚起するものとして、民主化（求心的・結社形成的）を志向するものといえよう。ただし、それは国民統合の手段として挙げられており、まず「国家主義」や「皇室中心主義」ありきの立場であったことも事実である。<sup>⑧</sup>

明治四十五年一月三日の啄木の日記には次のような記載がある。

市中の電車は二日から復旧した。万朝報によると、市民は皆交通の不便を忍んで罷業者に同情してゐる。それが徳富の国民新聞では、市民が皆罷業者の暴状に憤慨してゐる事になつてゐる。小さい事な

が私は面白いと思つた。国民が、団結すれば勝つといふ事、多数は力なりといふ事を知つて来るのは、オールド・ニッポンの眼からは無論危険極まる事と見えるに違ひない。

啄木の眼には、市電のストライキは「漸次地上に流出し来らむ」「隠れたる潮流」（畠山亨宛、明44・8・31）だったが、蘇峰の眼には教化されるべき「群衆」であり、原子化された個人であった。蘇峰の「普通選挙論」も、そのような原子化された個人を統合する必要から生まれたものだった。それは、「大正政変」の折、二度目の国民新聞焼討ちを経験して、いっそう明瞭になつていく。そして、そのようにしか見られない蘇峰は啄木にとつて、「オールド・ニッポン」の代表であり、乗り越えられるべき（世代）だったにちがいない。（了）

#### 注

- ① 国際啄木学会編、おうふう、二〇〇一年九月発行。「徳富蘇峰」の項目執筆者は古澤夕起子。
- ② 『新編人間啄木』（岩手日報社、一九五九・五）二五頁
- ③ 同右。七三〜七八頁
- ④ 同右。五五〜五六頁。古木巖については、浦田敬三『啄木その周辺 岩手ゆかりの文人』（熊谷印刷出版部、一九七七・一二）参照。また、岩城之徳『啄木歌集全歌評釈』（筑摩書房、一九八五・三）も掲出歌の「友」が古木巖をモデルとしていると指摘している。
- ⑤ 『国民新聞』明治三十五（一九〇三）年十一月九日、のち『第四日曜講壇』（民友社出版部、明治三十七年五月二日発行）に収録。
- ⑥ 『事典』項目の記述では、次のように書かれている。

そのころ読んだと確認できるのは「結婚論」（明35『国民新聞』日曜講談）のみだが、啄木は終生ジャーナリストとしての蘇峰に関心をもち続けた。『国民新聞』に履歴書を送ったこともあり（日記 明41・

9・21)、『国民新聞』の「東京だより」を手本にした「百回通信」(明42・10～11)もある。

しかし、項目執筆者の古澤が、別稿で「啄木の国民新聞への入社希望が、どれほど真剣なものだったかは疑わしい」(「啄木と徳富蘇峰―明治四十一年から四十二年」関西啄木懇話会「啄木文庫」第一〇号、一九八六・三)としているように、「国民新聞」に履歴書を送ったのは生活のためであり、思想的に蘇峰に向き合ったのは、明治四十二年の頃であって、それまで蘇峰は啄木の関心の埒外にあったというべきであろう。

⑦ 『蘇峰自伝』(中央公論社、一九三三・九)には、「麥節漢とか、藩閥への降服者とか、その他あらゆる悪名は、遠慮会釈なく予に雨集し来つた」とある。『国民新聞』を政府の機関紙にしようとしたことと、その背景については、有山輝雄『徳富蘇峰と国民新聞』(吉川弘文館、一九九二・五)九一～一〇六頁を参照。

⑧ 蘇峰の文章には、「美的生活は豚的生活」もしくは「醜的生活」と批判したものがあり(「四度地方青年に答ふる書」『国民新聞』明39・3・11、『第八日曜壇』民友社、明40・9収録)、啄木の思想にも否定的だった。啄木の啄木の「美的生活論」に対する言及については、拙稿「啄木・樗牛・自然主義」(「立命館文学」第五二九号、二〇〇六・一一)参照。

⑨ 木股知史ほか『和歌文学大系77 一握の砂／黄昏に／収穫』(明治書院、二〇〇四・二) 六六頁。

⑩ 「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」における蘇峰論に関しては、上田博「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」―『二重の生活』の統一―(「立命館文学」第四七八～四八〇合併号、一九八五・四～六、『石川啄木の文学』桜楓社、一九八七・四収録)に詳しい。

⑪ 小川武敏は、「世代的な主題」として「(老人と青年)が二項対立的に配置され、青年に過大な特権と期待が与えられる、という構図が顕著である」(前掲『石川啄木事典』二〇六～二〇七頁)と指摘し、小説「雲は天才である」(明39)、「道」(明43)、原稿断片「父と子」「杖の悲劇」、評論「時代閉塞の現状」(明43)、詩「はてしなき議論の後」などをその例として挙げている。こうした発想は終生変わらず、最晩年の「病室より」(明45・1・19稿)にはイブセンの戯曲「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」

の中の息子が言った「I am young」という言葉を紹介しつつ、「年老つた者は先に死ぬ。老人と青年の戦ひは、何時でも青年の勝になる。さうして新しい時代が来る」という一節がある。

一方、植手通有は「青年論と世代論、とくに前者の傾向は、生涯を通じて蘇峰に認められる」と指摘しているが(「解題」『明治文学全集34 徳富蘇峰集』筑摩書房、一九七四・四)、この点においても啄木と蘇峰の共通性がある。

⑫ 三和良一・原朗『近現代日本経済史要覧 補訂版』(東京大学出版会、二〇一〇・四) 二頁。

⑬ 西川俊作・阿部武司『日本経済史4 産業化の時代 上』(岩波書店、一九九〇・二) 五～七七頁

⑭ 田中王堂の考え方を顕著に示すものとして、たとえば、「生活の価値生活の意義」(「新小説」明42・12)には、「人間が生活を継続するには、彼れが置かれたる境遇と、彼れが持てる欲望との斉整又は融合を計り行くことが必要条件である」とあり、また、「自由思想家の倫理観」(「書齋より街頭に」廣文堂書店、一九一一・五)には、「人間の唯一の目的は幸福なる生活を獲得するにあるのであるが、幸福なる生活は、彼れが持てる欲望の実現を為るために、彼れのおかれた境遇を征服し、又彼れのおかれた境遇の整頓を計るために、彼れが持てる欲望を訓練することによって、即ち彼れの欲望と境遇との融合を謀ることによってのみ得らるゝものである」といった文章がある。前掲、上田博『石川啄木の文学』参照。

⑮ 外務省編『小村外交史』(原書房、一九六六・五) 四七九頁。

⑯ 「啄木における国家の問題」(「季刊科学思想」一九七二・一)

⑰ また、中山和子は、「従来に国家思想に不満足な人」の代表を荷風であるとすれば、その対極に『国家に服従してある人』の代表として、啄木は徳富蘇峰をみだしていることになる(「啄木のナショナリズム」明治大学「文芸研究」一九七九・三)と指摘している。しかし、『国家に服従してある人』とは、この場合、長谷川天溪のような人物を指すのであって、蘇峰ではないだろう。

天溪は、「各個人の自我は、此の国家主義を抱いて、而も現実とは何等の衝突をも見ぬ。我れ等は日本人であるから、日本々位の種々なる運動

や、思想と、必ず一致しなければならぬのである。乃ち此の自我を日本帝國といふ範圍まで押し拡げても、毫も現実と相離れ、或は矛盾するやうのことは無い」（「現実主義の諸相」「太陽」明41・6）と書いたが、それに對し、啄木は「長谷川天溪氏は、嘗て其の自然主義の立場から『国家』といふ問題を取扱つた時に、一見無難作に見える苦しい胡麻化しを試みた」と批判する。蘇峰と天溪を分かつものは、積極的に国家にかかわらうとする姿勢である。

⑱ 前掲、『石川啄木の文学』一一一頁。

⑲ これに先立ち、啄木は、釧路新聞記者時代、「予算案通過と国民の覚悟」（明41・1・29）と題する記事で、第二十四議會における増税案に對して、「政府は軍事費の傀儡にして、国民挙つて其奴隷とせられつゝある」と書いている。この時期の発言と比較すると、明治四十二年末の啄木はより「現実的」たろうとしていたことがわかる。それは、明治四十二年十二月の原稿断片である「所感數則」に「兎も角も日本の現在の政治的事情は、桂侯と政友会とが巧い具合に反を合せて助け合つて行く外には、国政を円満に進行せしむる途がないのである」と書かれていることにも明らかである。

⑳ 坂野潤治『明治国家の終焉 1900年体制の崩壊』（筑摩書房、二〇一〇・六）七七〜八五頁。

㉑ 同右。一二〜一三頁。

㉒ 海野福寿『日本の歴史』⑱ 日清・日露戦争（集英社、一九九二・一一）

㉓ 坂本多加雄『市場・道徳・秩序』（創文社、一九九一年六月）四三〜九二頁。

㉔ 注①、植手通有「解題」

㉕ 米田謙『徳富蘇峰 日本ナショナリズムの軌跡』（中央公論社、二〇〇三・八）七三〜八七頁。

㉖ 佐々木隆「徳富蘇峰と権力政治家―帝国日本興隆へのアプローチ」（『岩波講座「帝国」日本の学知 第4巻 メディアのなかの「帝国」』（岩波書店、二〇〇六・三）参照。

㉗ たとえば、「追遠論」（『国民新聞』明38・10・22、『第七日曜講壇』民友社出版部、明39・5収録）には、「日本帝国は、我が皇室を中心として、

組織せらる。大和民族ありて、皇室あるにあらず、皇室ありて、大和民族ある也」という発言がある。なお、米原謙によると、「皇室中心主義」という言葉を自覚的に使用するのには、改訂版『吉田松陰』（明41・10）以後だという（前掲、『徳富蘇峰 日本ナショナリズムの軌跡』七〇頁）。

⑳ 北川透「高山樗牛論」（『公評』一九七六・一）『北村透谷』試論Ⅲ（『蝶』の行方』冬樹社、一九七七・一二、収録）

㉑ 「時代閉塞の現状」には、「共通の怨敵たるオオソリテイ―国家」とあり、この「オオソリテイ」は『麴麴の略取』の「和訳例言」の中にある「強権とはオオソリチー、強権論者とはオオソリタリアンを訳したのである」という言葉を踏まえたものであるから、啄木の理解では、「国家」＝「強権」となる。近藤典彦「国家・強権」（前掲『石川啄木事典』）参照。

㉒ なお、ここで挙げた文章は、蘇峰の『日曜講壇』に収録されている。

「青年の風氣」（『第六日曜講壇』明38・2）

「成功狂」（『第七日曜講壇』明39・5）

「地方の青年に答ふる書」（『第八日曜講壇』明40・9）

「国家の愛護者」「乃公本位」「中毒せる成功論」（『第十日曜講壇』明44・5）

㉓ 蘇峰は、「単り耽溺青年に到りては、一切を否定し、一切を無視す。愛国心は、没分曉漢の所有物にして、道徳は野暮屋の看板たり」としている。指摘し、「吾人が耽溺者流を危険とするは、其の虚無的思想を危険とする」ことであつて、「此の利那主義者に到りては、我が帝国の白蟻とも称す可きものにして、「其の害毒の及ぶ所は、熱烈なる破壊的社會主義の比にあらず」と厳しく断罪している。

㉔ 当時の啄木の傾倒ぶりは、「綱島梁川氏を弔ふ」（『北門新報』明40・9・24、26、27）を参照。「時代閉塞の現状」では「我々は彼の純粹にて且つ美しき感情を以て語られた梁川の異常なる宗教的実験の報告を読んで、其遠神清浄なる心境に對して限りなき希求憧憬の情を走らせながらも、又常に、彼が一個の肺病患者であるといふ事実を忘れなかつた」と総括し、「我々の理想」は、「既成の外」や「他力」に求めるものではないことを主張している。

㉕ なお、この文章を天皇制批判とみるのは読み誤りである。拙稿「等身大

- の啄木」(『国際啄木学会研究年報』15 二〇二二・三)
- ③4 『日本型「教養」の運命』(岩波書店、一九九五・五)
- ③5 M. B. ジャンセン編『日本における近代化の問題』(岩波書店、一九六八・七)収録。本稿では、『丸山眞男集9』(岩波書店、一九九六・三)を使用した。

③6 啄木による日露戦争の相対化は、「大硯君足下」(明44・1・7稿)に明瞭に示されている。

戦争は決して地震や海嘯のやうな天変地異ではない。何の音沙汰も無く突然起つて来るものではない。《中略》歴史を読むと、如何なる戦争にも因あり果あり、恰も古来我が地球の上に戦はれた戦争が、一つとして遂に避くべからざる時勢の必然でなかつたものがないやうにも見えるが、さう見えるのは、今日我々の為に残されてゐる記録が、既に確定して了つた唯一つのプロセスのみを語つて、其の当時の時勢が其のプロセスを採りつゝある際に、更に幾多の他の方向に進むべき機会に遭遇してゐた事に就いては、何も語つてゐないからである。

③7 ただし、この時期の啄木の主張に堺利彦ら社会主義者の普通選挙論の影響がうかがえること(拙稿「石川啄木論―『明日』という時間―上田博編『明治文芸館V』嵯峨野書院、二〇〇五・一〇 参照)、また、明治四十三年の第二十六議会で普通選挙法案が衆議院を通過した後、貴族院で一蹴され、その後、社会主義と密接な関連をもつものとして弾圧されたことを考えれば、当時においては普通選挙の主張でさえ急進的な改革案であつたと

もいえる(松尾尊允『普通選挙制度成立史の研究』岩波書店、一九八九・七、八三〜九七頁)。ちなみに、蘇峰は、「我国の現行制度の如きも、名は制限選挙といふも、制限の最も軽きものたり」(『選挙権の拡張』「国民新聞」明44・12・6)と、明治四十四年の時点では、普通選挙を重要とみなしてはなかつた。

③8 和田守は、蘇峰の普通選挙論は、一九一三年二月の「大正政変」以降のこととし、『時務一家言』(一九一三・二)の「平民主義の旺盛」という章で「藩閥者流」に偏重していた政権を「国民一般」に分配せよと主張したことを紹介している(『近代日本と徳富蘇峰』お茶の水書房、一九九〇・二一〇七頁)。

③9 『時務一家言』の「皇室中心主義」という章には「帝国主義や、平民主義や、社会主義や、悉く挙げて之を繋ぐものは何ぞや。吾人か平昔唱道する皇室中心主義是れ也」とあり、普通選挙も平民主義も「皇室中心主義」の枠内のものでしかないことがわかる。

※啄木の著作に関しては、『石川啄木全集』(筑摩書房、一九七八・五〜七九・二)を使用した。また、蘇峰の『将来之日本』『新日本之青年』『時務一家言』は、『明治文学全集34 徳富蘇峰集』(筑摩書房、一九七四・四)を、『大正の青年と帝国の前途』は、『近代日本思想体系8 徳富蘇峰集』(筑摩書房、一九七八・六)を使用した。

(本学文学部教授)